法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

ニュース・フレーム論の認識論的探究（２）：プラグマティズム

FUJITA, Mafumi / 藤田, 真文

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
69
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
23
(発行年 / Year)
2022-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026184

ニュース・フレーム論の認識論的探究（2）

――プラグマティズム

藤　田　真　文

1.　ニュース・フレーム論とプラグマティズム

1.1　本論文の目的

本論文は，ニュース・フレーム論を認識論の側面から探究する。ニュース・フレーム論の「認識論 epistemology」的探求は，ニュース・フレームが，報道された出来事のどのような要素（what）をどのような方法（how）でフレーミングしているのかを考察することを理論的目的とする。

そのために筆者は，①パラダイムとその言語哲学的基礎としての言語ゲーム，②プラグマティズム，③社会的構築主義という三つの哲学的理論的知見を参照し，ニュース・フレーム論を認識論的に探究する。前稿ではパラダイムとその言語哲学的基礎としての言語ゲームを取り上げた。本稿では，プラグマティズムがニュース・フレーム論にどのような理論的示唆を与えるかを考察したい。

1.2　ニュース・フレーム論とプラグマティズムの学説史的関連性

ニュース・フレーム論においてフレーム論の先駆的研究とされる E. Goffman は，「Frame Analysis」の序章でプラグマティストの W. James と A. Schutz に言及し，James-Schutz の社会的現実 social reality 概念が自分の考察の出発点だとする。

> 1869年に刊行された『心』の中の一章である W. James の著名な論考「現実の認識」（The Perception of Reality）によって確立された伝統を私はフォローしてみたいと思う。James は現実とは何かを問うかわりに，「どのような状況において，われわれは物事を現実と考えるのか」という問いを強調することで，破壊的な現象学的転回を持ち込む。彼が含意する現実にとって重要なものとは，私たちの本当らしさ realness の感覚であり，その反対にこの本当らしさの性質が欠けているものもあるという私たちの感触である。したがって，われわれはどのような状況でこの感触が生まれるのかを問うことができる。この問いについては，カメラによって考察することができる小さな扱いやすい問題とカメラが写真を撮るということとは違う問題に言及することになる。（Goffman 1974:2）。

そして，Goffman は James と Schutz の「多元的現実」に論を進める。Goffman と James,

Schutz の関係については，ニュース・フレーム論と社会的構築主義について考察する次稿で再び検討する。ここでは学説史的関連性を確認するに留めたい。

中河伸俊が指摘するように Goffman のフレーム分析とニュース・フレーム論の学説史的関連性は，さほど濃密ではない（中河 2015:131-2）。Goffman の「Frame Analysis」が発想の原点だとするニュース・フレーム論の論考はいくつかあるものの（Wei 2020:38;Johnson-Cartee 2005:159），理論展開の中心的な概念としては使われていない。ニュース・フレーム論の代表的な研究者である W. A. Gamson は「政治社会学における Goffman の遺産」という論考を書いているが，社会運動への動員と状況のフレーム化の関連性という文脈で Goffman に言及しているだけである（Gamson 1985）。Goffman のフレーム概念に比較的言及している業績として，G. Tuchman の『ニュース社会学』がある。Tuchman は，不定形な出来事や発言を意味のあるニュースに変える認識枠組みとして Goffman のフレーム概念が有効だとする。ただし，Goffman が出来事をニュースに変える制度的なメカニズムに関心がないとも指摘している（Tuchman　邦訳書：260-264）。

Goffman のフレーム分析が対面的な相互作用場面におけるフレーム化を考察の中心にしていることから，ニュース・フレーム論への応用はたしかに難しいのであろう。ただし，Goffman がフレームの発想を得たとする G. Bateson の「遊び」概念と L. Wittgenstein の言語ゲーム（Sprachspiel 言葉遊び・劇）論には一定の理論的共通性が見てとれる。この点については，次稿で検討してみたい。

また，次節で詳しく検討するが，W. Lippman『世論』における「外界と頭の中で描く像」の議論は，ニュース・フレーム論の先駆的な業績と見なすことができる。『世論』や『幻の大衆』において Lippman は，コミュニティの範囲を超えた「大社会（グレート・ソサエティ）」に民主主義制度が対応しておらず，新聞も真実を伝える機能を果たしていないとの悲観論を提示した。Lippman の悲観論に対し，プラグマティストの J. Dewey は『公衆とその諸問題』で批判を試みた（Lippman- Dewey 論争）。Dewey は，コミュニティを保持しながら，自由で充実した相互伝達（インターコミュニケーション）に支えられた「大共同社会（グレート・コミュニティ）」を創設することを提案する。

> 大共同社会とは，不断に拡大し続け，また複雑に分岐する協働的活動の諸結果がことばの完全な意味において熟知され，その結果組織された明確な「公衆」が出現するような社会である。最も高度な，最も困難な種類の探究と，精巧で，微妙で，生気に満ち，かつ敏感なコミュニケーションの芸術とが，伝達と普及のための物理的な機構を手に入れて，それに生命を吹き込まなければならない。（Dewey 1927 邦訳書：227）

ただ筆者には，「伝達と普及のためのコミュニケーションの芸術の物理的な機構」によって組織される明確な「公衆」という Dewey の提起は具体性・実現性を欠いており，Lippman- Dewey 論争はかみ合わず空振りに終わっているように思われる。ここでは，Lippman とプラグマティストの Dewey が，論争可能な理論的基盤を共有していたことのみを確認することにして論を進めたい。

本論文では以下，①W. Lippman『世論』における「像」の再解釈，②真偽に対するプラグマティックな態度と「客観主義パラダイム」の乗り越え，③社会的相互作用による真理の確定と議論を進めていく。

2. W. Lippman『世論』における「像」の再解釈

ここでニュース・フレーム論の先駆的な業績という視点から，Lippman『世論』を読み直したい。というのは，『世論』における「外界と頭の中で描く像」の議論は，前稿で検討した Wittgenstein の「像」の概念から再解釈が可能と思われるからである。

『世論』冒頭は，ジャーナリズム論ではあまりに有名な大洋の島のエピソードから始まる。考察のために時系列的に概括する。時点 1 ：1914年イギリス人，フランス人，ドイツ人が住んでいる大洋の島。島には電信もなく月に一度郵便船が来るだけだった。島の住民の話題の中心は，フランス本国の殺人事件の裁判だった。時点 2 ：同年の 9 月半ばに着いた郵便船の船長から，六週間以上前からイギリス・フランスとドイツが戦闘状態になっていたことを知らされる。「その間，島の人びとは現実には敵同士であったのに，まるで友人同士のように振舞っていたわけである。ふしぎな六週間であった」（Lippman 邦訳書上：13-4）。Lippman は，このエピソードをふまえ，次のように言う。

> われわれは，自分たちがその中に暮らしているにもかかわらず，周囲の状況をいかに間接的にしか知らないかに気づく。環境に関するニュースがわれわれに届くのが，ある時は速くあるときは遅いことはわかっている。しかし，自分たちがかってに実像だと信じているにすぎないものを，ことごとく環境そのものであるかのように扱っていることには気づいていないのである。まして，われわれがいま現在行動のよりどころとしている信条についてもそれがあてはまることを，忘れずにいるのはずっとむずかしい。（Lippman 邦訳書上：15）

この状況を Wittgenstein の「像」の概念から考察してみたい。この島の人々は，フランス本国の殺人事件については新聞記事，ヨーロッパの戦争（第一次世界大戦）については船長の談話という，いずれも言葉によって構築された像によって認識していることになる。Wittgenstein 前期『論理哲学論考』の像概念からすれば，「像からだけでは，真・偽を見わけることができない」。殺人事件を伝える新聞記事はフェイクニュースかもしれないし，船長はヨーロッパで戦争が起こっていると嘘を言っているかもしれない。そして「像の真・偽を見わけるために，私たちは像を現実と比較する必要がある」とすれば，島の人々はフランスに行って裁判を傍聴し，本国に帰って本当に戦争しているのかを確かめるしかないことになろうか。

第一に，ここで注意すべきは，島の人々が関心をもっている（あるいはもつべき）「環境」が，島から遠く離れたヨーロッパまで延長されているということである。島の人々も，Lippman や

Dewey が問題にした「大社会（グレート・ソサエティ）」に暮らしていることになる。われわれは，著書『世論』において Lippman が「擬似環境」批判を展開していると誤解しがちである。だがむしろ Lippman は，新聞記事や船長の談話がフランスの裁判やヨーロッパの戦争という「現実」を写しとる「模型」＝実像となっており，「模型」を通して「真の」環境について知るべきだと言っているのである。次のような叙述では，Lippman は，大社会において新聞が伝えるニュースと真の環境＝真実には，現状ではずれがあるとも指摘している。Lippman は，ニュースが真実を伝えていると正確に検査できる事例は，非常に稀だとする。

> ニュースと真実とは同一物ではなく，はっきりと区別されなければならない。これがわたしにとってもっとも実り多いと思われる仮説である。ニュースのはたらきは一つの事件の存在を合図することである。真実のはたらきはそこに隠されている諸事実に光をあて，相互に関連づけ，人びとがそれを拠りどころとして行動できるような現実の姿を描き出すことである。社会的諸条件が認知，測定可能なかたちをとるようなところにおいてのみ，真実の本体とニュースの本体が一致する。人間の関心が及ぶ分野からすれば，それは比較的小部分でしかない。（Lippman 邦訳書下：214-5）

第二に，ここでは，Lippman が，それが真であれ偽であれ現実に対する像が「行動のよりどころとしている信条」をもたらすとしている点に注意したい。これは，ニュースフレームがオーディエンスの認識・行動にどのような影響を与えるかという考察に通じる指摘である。Lippman は，次のように言う。

> 行為の現場，その現場について人間が思い描くイメージ，そして，そのイメージに対する人間の反応がおのずから行為の現場に作用するという事実。世論を分析する者はこの三者の関係を認めることから始めなければならない。（Lippman 邦訳書上：31）

大洋の島のエピソードでいえば，「行為の現場」とは島であり，島について人々は「平和だという（Lippman からすれば誤った）イメージ」を思い描いている。そして，そのイメージが「まるで友人同士のように振舞う」という（Lippman からすれば誤った）反応をもたらしている。

ただ本稿で参照したいのは，日常生活で言語を用いてわれわれが何を行なっているかを見るべきだとする Wittgenstein 後期『哲学探究』の視点である。たとえヨーロッパで戦争が起こっていたとしても，島には戦闘がおよんでおらず平穏な日常生活が続いていた。島の人々は直接経験できる像に基づいた信条（信念）によって行動していたのだから，六週間「まるで友人同士のように振舞っていた」としても，それは必ずしも誤った像に基づいた振る舞いとは言えないのではないだろうか。それは，その時点で真か偽か確定することはできないが，当面不都合がない限りはとりあえず真として受け止め判断・行動するというプラグマティックな態度である。本稿では，この後期

Wittgensteinに由来するプラグマティックな態度についても検討したい。

3. 真偽に対するプラグマティックな態度と「客観主義パラダイム」の乗り越え

3.1 初期プラグマティズムにおける漸進的・実験的真理観

3.1.1 既存の信念と新しい事態への対応

まず，C. S. Peirce，James，Dewey ら初期プラグマティストの真理観を見ておきたい。彼らの真理観は，現代のネオプラグマティズムまで継承展開されており，またニュースフレーム研究にも示唆的である。

Peirce は，これまで抱いてきた信念に疑念が生じたときに，疑念がある不安定な状況は居心地が悪いので，なんらかの「探究」が始まるとする。

> 信念は意識の束の間の状態ではない。信念とは心の習慣であり，したがって本質的に一定期間継続する。それは，（少なくとも）たいていは意識されない習慣である。他の習慣と同様に，信念は，信念を揺るがす予期せぬ出来事に出会うまでは，完全に自己充足的である。疑念の方はこれとはまったく逆の性質を有する。疑念は習慣ではなく，習慣を欠いた状態である。しかし，ある習慣を欠いた状態というのは，いやしくもそれが何か重大なものであるかぎりは，活動が不安定な状態であり，やがては何らかの方法である習慣に取って代わられねばならない。（Peirce 1905 邦訳書:209）

> 疑念が刺激となって，何とか信念の状態に達しようとする奮闘努力が始まる。この奮闘努力のことを，表現上，それほど適切な名称ではないかもしれないが，ここでは，探求という言葉で表すことにしよう。
>
> 疑念という刺激は，信念に達しようとする奮闘努力の唯一直接的な動因である。（Peirce 1877 邦訳書:152）

Peirce におけるこのような信念と疑念の関係は，Khun の通常科学のパラダイムとパラダイムを揺るがす変則性の関係に似ている。これまでの習慣に疑念が生じることによって，活動が不安定な状況になる。この不安定な状況はそのままにされることはなく，探究を通じて信念を再構築できる別の習慣に取って代わる。

James は，既存学説で説明できる知見から新しい事実を解釈することに，科学における観念（概念）の意味があるとした。これもまた，Khun の通常科学パラダイムの効用に近い考え方である。

> しかし科学が更に進歩を遂（と）げるにつれて，われわれの有する法則の大部分は，否（いな）おそらくは全部が，単に近似的（きんじてき）なものであるに過ぎないという考えが有力になってきた。（中略）研究者

は，どの学説も絶対に実在を写したものではなく，ただある見地からみれば有用でありうるというに過ぎないと考えるようになってきた。これらの諸説の大きい効用は古い事実を要約し，新しい事実に嚮導することにある。（James 邦訳書:65）

観念（それ自身われわれの経験の部分に過ぎないものであるが）が真なるものとなるのは，この観念によってわれわれの経験の他の部分との満足な関係が保たれるからであり，経験の他の諸部分を統括することができるし，また無限に相次いで生ずる特殊な現象を一々調べなくとも概念的近路を通って経験部分の間を巧みに動きまわれるからである，と言うにほかならないのである。（James 邦訳書:65）

Peirce と比較すると，James のほうが既存の観念と新しい事態との「調停」（古い事実を要約し新しい事実に嚮導すること）に重きを置いているのが特徴である。

Dewey も，実際的な活動の不確実性を減らすことに，探究の出発点があるとする。

実際的活動の特異な性格――それは極めて内在的なもので除去できないものであるが――は，それに随伴する不確実である。それについて，われわれは，行動せよ，しかし，危険を覚悟して行動せよ，と言わざるを得ない。遂行さるべき行動に関する判断や信念は，不確実な可能性以上のものを達成できない。しかしながら，思考を通して，人びとは不確実性の危険から脱出できるように思われるのである。（Dewey 1929 邦訳書:10）

Dewey は，いままでは環境に適応できていたという感覚が中断されるショックで，探究が促されるとする。

中断としての感覚は，次のような問題を提出する。このショックは何を意味するか。何が起こったのか。問題は何か。私と環境との関係は，いかに乱れているのか。どうすればよいのか。環境に起こった変化に応ずるのには，私の行為のコースをどう変えたらよいのか。それに応ずるのには，私の行動をいかに調整し直したらよいのか。（Dewey 1920 邦訳書:82）

3.1.2　研究者コミュニティにおける真実性の確定

Peirce，James，Dewey ら初期プラグマティストは，真理の確定は研究者個人ではなく，研究者のコミュニティまたは社会において達成されるとする。Peirce は，研究者のコミュニティにおいて信念を確定することが重要だとする。これも Khun のパラダイム論に通じる考え方である。

他の人の思想や意見であっても，自分の思想や意見と同等の意義を持つかもしれないという考え方は，明らかに新しい第一歩であり，しかも極めて重要な進歩である。（中略）世捨て人

にでもならないかぎり，我々は必ず，お互いの意見に影響を及ぼし合うものである。したがって，問題は，単に個人においてではなく，コミュニティにおいて，いかにして信念を確定するかである。（Peirce 1877 邦訳書:156）

James も Peirce と同じく，真理が研究者相互の「観念の交換」によって構築されるものだとする。

すべての人間の思考は弘められるものである。われわれは互いに観念の交換を行う。われわれは験証をひとに貸したりひとから借りたりする，つまり社交という手段によってお互いに験証を融通し合うのである。こうしてすべての真理は言葉として築き上げられ貯えられ，そしてあらゆる人間に役立つものになる（James 邦訳書:213-4）

さらに Dewey においては，真理の共有の範囲が研究者集団にとどまらず，多元主義社会を支える原理とされている。

社会というのは，多くの集団のことであって，一つの組織のことではない。社会は集団を意味する。集団とは，あらゆる形の経験のより良い実現のために共通の交際および行動に参加することであり，経験は，共有されることによって増大し確実になるものである。それゆえ，相互的なコミュニケーションおよび参加によって高められる善と同じ数だけの集団が存在する。そして，善の数は，文字通り限りのないものである。いや，公共性とコミュニケーションとに堪え得るか否かが，その謂わゆる善が本物であるか偽物であるかを決定するテストなのである。（中略）コミュニケーション，共有，共同参加こそ，道徳的な法則および目的を普遍化する唯一の現実的な道なのである。（Dewey 1920 邦訳書:178）

3.1.3　行動指針としての信念

初期プラグマティストは，これまで行動を支えてきた信念が揺らぎ活動の指針を失うことから新しい探究が始まるとした。逆に言えば意味のある探求とは，行動の指針となる信念をえることを目的とした考察である。Peirce は，次のように述べている。

信念に必然的に含まれているのは，我々の本性のうちに行為規則を確立するということ，一言でいえば，ある習慣を確立することである。（Peirce 1878 邦訳書:177）

ある与えられた状況下にあって，いかにふるまうかについて何の関連もないような統一であるなら，われわれはそれを思考とは呼ばない。それゆえ，思考の意味を明らかにしようとするには，その思考がいかなる習慣を作り出すのかを明らかにしさえすればよい。なぜなら，ある事物が何を意味しているかは，それがいかなる習慣をうちに含んでいるかということにほかならないからである。（Peirce 1878 邦訳書:179-80）

人間の行動の指針となる限りで真理が有用だとする点は，James も Peirce と同様である。James は，目前の課題への適用ではなくとも，新しい事態に備えて真理を蓄えることの効用も視野に入れている。

> 余計な真理，つまり事情によっては真理となるかもしれないというだけの観念，を広く貯えておくことの利益はいうまでもない。われわれはこのような余計な真理をわれわれの記憶の片隅に貯えている。われわれの参考書はかかる貯えの過剰で満たされているのである。そのような余計な真理が実際にいざ必要となると，それは冷蔵庫から取り出されて現実世界で働くことになり，それにたいするわれわれの信念が活動しはじめる。（James 邦訳書:203）

> 第一義的には，そして常識のレヴェルにおいては，心の状態の真理とは，導かれて行く価値のある方向へわれわれを導いて行くというこの機能をいうのである。（James 邦訳書:204）

Dewey もまた，哲学的探究が実際の行動指針に寄与してこそ意味があると考える。Wittgenstein や Khun と同じく，Dewey は知識を行動の範型（パラダイム）と捉えている。

> 哲学の問題は，追求されるべき目的についてのわれわれの判断と，この目的を達成するための手段についての知識の相互作用に関わる。科学において，知識の前進の問題が，なにをなすべきか，いかなる実験を遂行すべきか，いかなる装置を発明し，使用すべきか，いかなる計算に従事すべきか，いかなる数学の分野を用いるべきか，または完成されるべきかであるのと同じように，実践におけるその具体的問題は，なにをわれわれは知る必要があるのか，いかにわれわれはその知識を獲得するか，またいかにそれを適応するかということである。（Dewey 1929 邦訳書:41-2）

Dewey は，カントが『純粋理性批判』と『実践理性批判』という 2 冊の著作によって，認識的確実性の対象と実践的な道徳的確実性の対象とを分割した点を評価している（Dewey 1929 邦訳書:63）。カントの認識論については後続のプラグマティストが批判的に考察しているが，ここでは Dewey が実践を哲学の課題としたカントを評価していることだけを確認しておく。

3.1.4　実験的介入による漸進的な真理の確定

プラグマティズムの思想をもっとも特徴づけるのが，認識の対象をただ観ているのではなく，なんらかの方法で対象に関与することで真理を確定するという立場である。Peirce の次のような主張は，プラグマティズムがプラグマティズムとして堅持すべき「格率」principle とされている。

> 我々が持つ概念の対象は何らかの効果を及ぼすと，我々が考えているとして，もしその効果が行動に対しても実際に影響を及ぼしうると想定されるなら，それはいかなる効果であると考えられるか，しかと吟味せよ。この吟味によって得られる，こうした効果について我々が持つ概念こそ，当の対象にについて我々が持つ概念のすべてをなしている。（Peirce 1878 邦訳書:182）

Peirce があげている事例として，例えば「硬い」という概念は，「硬い物は他の多くの物体でこすっても傷がつかないということ」を意味する。だが，硬い物 A と柔らかい物 B は，実際に両方を擦り合わせるというテスト（吟味）をしてみないかぎり，違いはわからない。認識する者が実験的に介入することで真理が確定されるのである。

Peirce は，探究によって自らの信念を確定する数種類の方法を吟味する。信念の確定方法には，自分が気に入った答えだけを採用する（固執の方法），国家が設立した何らかの機関が強制する答えを採用する（権威の方法），あらかじめ考えられた理性にかなう答えを採用する（ア・プリオリな方法）などがある。しかし Peirce はこれらの方法にはそれぞれ欠点があり，「科学的探究方法こそが，唯一，正しい方法と間違った方法の違いを示している」とする（Peirce 1877 邦訳書:163）。

Dewey は，科学的探究についてより詳細に検討している。Dewey は，現代の科学者が単に物事を観想しているのではなく，対象に対してなんらかの操作を加えることで（介入することで）認識を得ようとしているという。例えば，天文学者は星を操作することはできないが，レンズやプリズムを使って地上に届く光を操作し，天体について知ることができる（Dewey 1920 邦訳書:101）。

> 科学の発達が現実に行なわれるうち，大変な変化が起こって来た。実際の認識が弁証的なものでなくなり，実験的なものになり，知るという働きは変化に向けられ，或る変化を生む能力の有無が認識をテストするものになった。実験的諸科学にとって，知るということは，知的に管理された一種の行為を意味する。観想的であることをやめて，真の意味で実践的になる。（Dewey 1920 邦訳書:108）

Dewey にとって科学的探究とは，実践的目的を達成するために「知る必要があるもの」に対し，実験によって意図的に介入することを意味する。

> 科学的探究は，われわれの日常生活において経験された環境の事物から，われわれが眺め，扱い，使用し，楽しみ，苦しむ事物とともに出発する。これが，日常の質的世界である。（中略）実験的探究は，それらを思考にたいする挑戦を差し出すものとして扱うのである。それらは問題の素材であり，解決の素材ではない。それらは，知識の対象というよりも，知られるべきものである。知ることにおける第一歩は，解決を必要とする問題を位置づけることである。（Dewey 1929 邦訳書:108）

したがってプラグマティズムにとって真理を知ることとは，James のいうように仮説を実験によって検証するという「漸進的」なものとならざるをえない。

> 真理は以前の真理に接木（つぎき）され，これを修正してゆく。それは慣用句が以前の慣用句に接木され，法律が以前の法律に接木されるのと全く同じである。以前の法律と新しい事件が与えられると，裁判官は両者を撚り合わして新しい法律を作り上げる。（中略）以前からの真理があり，目新しい事実があらわれる，――するとわれわれの心は新しい真理を発見するのである。（James 邦訳書:240）

Dewey は，実験による漸進的な真理の確定は，自然科学だけではなく人間や社会の理解にも適用できるとする。

> 実験的方法を物理学から人間に持ち越す（中略）この移転とともに，これら標準，原理，規則，また善ならびに財についての一切の主義と信条は，仮説と認められるであろう。厳格に固定される代わりに，これらのものは，それらに基づく行動によって効果をもつ結果を通して，検査され，確認される――また修正される――知的道具として扱われるであろう。（Dewey 1929 邦訳書:291）

Peirce，James，Dewey らの初期プラグマティズムは，①信念の保持と信念が揺らぐことによる探究の開始，②研究者コミュニティにおける真実性の確定，③行動指針としての真理，④実験的介入による漸進的な真理の確定という共通の特徴を持つ。初期プラグマティズムでは主に自然科学を中心に議論が展開されているが，Dewey が最後に述べているように，人々の信条（信念）が社会行動にどのように作用するかの考察にも移行できる。さらに言えば，Khun のパラダイム概念などを媒介して，ニュースフレーム論にも応用可能と思われる。現代のネオプラグマティストの業績を参照し，さらに議論を進めたい。

3.2　ネオプラグマティズムによる客観主義批判

3.2.1　観察の限界

ネオプラグマティストの W. V. O. Quine や R. Rorty は，自然科学などで観察だけで確定できる真理には限界があり，真理の確定には言語，言語によって形成される概念・命題が必ず介在しているという。

> 困ったことに，直接経験はそれだけでは自律的領域としてまとまりをなさないだろうからである。直接経験を一つにまとめるのは，もっぱら物理的事象への言及なのである。（Quine

1960 邦訳書:3）

〔物理的〕措定物と思弁に頼らずわれわれが手にしうるものといえば，現在の感覚所与と，過去の感覚所与についての現在の記憶だけである。現実の大部分の記憶は，過去の感覚の痕跡ではなく，むしろ，過去に概念化や言語化をしたものの痕跡に他ならない。（Quine 1960 邦訳書:4）

例えば，報告者 A がなにか赤いものを見て‘Red’と言ったとする。判定者 B も A が見ていると思われる同じ対象を観察して赤いと判断できるとき，A の‘Red’という発話を是認する。したがって，B は「かれ自身の網膜への赤い光の照射を部分的に手掛かりとしている」（Quine 1960 邦訳書:9-10）。この限りでは，AとBは何か直接経験（観察）できるものをやり取りしているように思える。

ところが，別の実験で報告者 A が二本の試験管の中身を混ぜて薄緑色になったのを観察して，「この中には銅が含まれている」と言ったとする。今度は，視覚＝観察だけを手がかりにしては A の報告が正しいかどうかを判定者 B は判定できない。例えば，試験管のどちらかに銅に反応する試薬が入っていたのだろうという「過去に概念化や言語化をしたもの」を頼りにしなければならないのである（Quine 1960 邦訳書:17）。

Quine は，「銅に反応する試薬が入っていた」という付帯情報に頼らなくても，報告者 A と判定者 B が合意できる報告を「観察文（observation sentence）」と呼ぶ（Quine 1960 邦訳書:66）。網膜に照射された赤い光を手がかりにできる‘Red’の報告と判定は，観察性が高いかもしれない。だが，「この中には銅が含まれている」との報告になると，観察性が一段低くなる。

さらに，ある人物を観察して A が発した‘Bachelor’（独身男性だ）という報告を，付帯情報なく視覚刺激だけから正しさを判定するのは困難であろう（Quine 1960 邦訳書:65-6）。「観察性という概念は社会的である。（中略）刺激意味が被験者に応じて大きく揺れ動く場合，定義上，当の場面文は観察性が低い」（Quine 1960 邦訳書:70）。

3.2.2　表象と認識から社会的実践への移行

Rorty は，21-22　デカルト，ロックおよびカントの哲学においては，知識を可能にしている「心的過程」や「表象活動」の探究が課題であったとする。彼らにとって，「知ることとは心の外に存在するものを正確に表象することである。したがって知識の可能性や本性を理解することは，心がこのような表象をどのような仕方で構成できるのかを理解することにほかならない」（Rorty 1979 邦訳書:21-22）。

れわれの哲学的確信のほとんどは，命題よりもむしろ描像によって，言明よりもメタファーによって規定されている。伝統的哲学を虜にしている描像は，さまざまな表象――あるものは正確であり，あるものは不正確である――を内に含む，純粋に非経験的な方法によって研究す

ることのできる巨大な鏡としての心という描像なのである。（Rorty 1979 邦訳書:31）

Rorty によれば，逆に「巨大な鏡としての心」という研究課題を捨て去ったのが，Wittgenstein，M. Heidegger，Dewey の 3 人だとする（Rorty 1979 邦訳書:24）。本稿でこれまでとりあげてきた Wittgenstein の「像」の議論，Dewey の「実験による介入」を参照すれば，Rorty が意味するところは明らかであろう。

「よく知るためには，対象をよく見る必要がある」といった言い方に象徴されるように，「巨大な鏡としての心」という描像が視覚に依存していることに注意したい。

> いかにしてよりよく認識するかを知ることは，いかにして疑似-視覚的な能力，すなわち＜自然の鏡＞の働きを増進させるかを知ることであると考え，さらには知識を正確な表象の集合体と見なすようになる。そして，正確な表象をもつためには，＜鏡＞の中に特別な，特権化された部類の表象――すなわち，その正確さを疑うことができないまでに強い強制力を発揮する表象――を発見しなければならないという考えが生じてくることになる。（Rorty 1979 邦訳書:172）

Rorty は，「客観的」という概念に混乱をもたらしているのは，この「心の外に存在するもの」と「それを正確に表象すべき心」という二分法だとする。「客観的」という言葉は，「意見の一致が得られる見解を，関連性のない考察によって歪められていない議論の帰結として特徴づけること」と，「事物を実際あるがままに表象すること」との二つを意味するように用いられてきた（Rorty 1979 邦訳書:387）。そして，これまでの哲学の伝統では，「唯一有用な『客観性』の概念が，鏡に写すことではなく『意見の一致』であると承認されることは，ほとんどなかった」（Rorty 1979 邦訳書:391）。

しかしながら，観察についての Quine の議論ですでに見てきたように言語や概念という付帯情報なしに真理を確定することなど不可能である。そうではなくて，Rorty も「会話の問題および社会的実践の問題」に哲学の課題を移すべきだと主張する（Rorty 1979 邦訳書:186）。

> われわれはこれらの疑問をひとまとめにして，端的に次のように問うことができる。すなわち「いかにしてわれわれの仲間はわれわれの言明のうちどれが信ずべきもので，どれが信ずるためにはさらなる確証を必要とするものであることを知るのか」と。（Rorty 1979 邦訳書:189）
>
> あからさまに言えば，言明というものがそれが表現している内的表象の性格によってではなく，むしろ社会によって正当化されるものであるとするならば，特権化された表象を分離しようとする試みはまったく無意味なものとなってしまうのである。（Rorty 1979 邦訳書:190）

Rorty は，「社会がわれわれに何を語らせているのかを明らかにすることによって」どのように

真理が確証されるのかを明らかにしようとする学問的態度を，「認識論的行動主義」と呼ぶ。これが「デューイとウィトゲンシュタインに共通した態度の本質なのである」と言う（Rorty 1979 邦訳書:190）。Rorty は，次のようにも言う。

> われわれは内部よりもむしろ外部へ，内的表象の間の諸関係よりもむしろ正当化の社会的文脈の方へと向かわなければならない。こうした態度は最近の数十年間における哲学のさまざまな展開，特にウィトゲンシュタインの『哲学探究』とクーンの『科学革命の構造』に由来する展開によって助長されてきた。（Rorty 1979 邦訳書:227）

Khun が『科学革命の構造』において展開したパラダイム論，Wittgenstein の『哲学探究』における言語ゲーム論と像の議論，そしてプラグマティズムにおける実験的介入による真理の確定といった，前稿と本稿をとおしてこれまで見てきた思潮がともに，社会的相互作用によって構築される真理の確定へと考察を向けるべきことを示唆している。

4. 社会的相互作用による真理の確定

4.1 私－他者－対象の三角関係

D. Davidson は，Quine が観察文の主張をおこなった報告者 A と判定者 B，そして観察の対象という三者の関係による真理の確定について，さらに詳細に検討する（Davidson 2001 邦訳書:146）。Davidson は，命題的態度を持つことができるのは，言葉を持っている（＝解釈を行ったり言語的コミュニケーションに加わったりすることができる）動物だけだとする。この主張を裏付けるために，やや物騒だが Davidson は，「ある人が，熱線追尾ミサイルの動きを説明するのに，そのミサイルが飛行機を破壊することを欲していて，じっさい観察された動きのとおりに動くことでそれを実現できると信じていた」という事例をあげる。しかし，ミサイルが欲求と信念もっているという考えは愚かであろう。ある人がミサイルに帰属させた欲求と信念をもっているのは人間であり，彼らが熱線追尾ミサイルを設計し製造したがゆえに，ミサイルはそのとおりの動きをしたのである（Davidson 2001 邦訳書:166）。

Davidson は，私－他者－対象の三角関係によって真理を確定する方法を，「三角測量（triangulation）」と呼ぶ（Davidson 2001 邦訳書:190）。そして，対象についての自分の認識が正しいかどうかを確定できるのは，他者とのコミュニケーションによってであるとする。

> 他人の誰かの発言を理解するために，私は，彼女が考えるものと同じものについて考えることができなければならない。つまり彼女と世界を共有していなければならない。すべての事柄に関して彼女に同意する必要はない。しかし同意しないためには，われわれは同じ主題について同じ命題を抱き，同じ真理概念を抱いていなければならない。コミュニケーションというも

のは，コミュニケートする者の双方が，共有された世界すなわち間主観的な世界についての概念をもち，さらに相手もそのような概念をもっていると正しく考えている，ということに依拠している。だが，間主観的な世界の概念とは，客観的な世界の概念，つまりコミュニケートする者の双方がそれについて信念をもちうるような世界の概念なのである。（Davidson 2001 邦訳書:172）

ウィトゲンシュタインの提案するところでは，あるいは少なくとも彼が提案していると私の解するところでは，他の人々との相互作用がなければ，事物を間違って捉えたり正しく捉えたりするという概念をわれわれがもつことはなかった。（Davidson 2001 邦訳書:208）

Quine の実験を例にすると，報告者 A が二本の試験管の中身を混ぜて薄緑色になったのを観察している一本目の線。判定者 B が試験管の中身が薄緑色になったのを観察している二本目の線。そして，「報告者 A が試験管を見て『この中には銅が含まれている』と言ったこと」を見ている判定者 B の三本目の線。この三本の線が揃ってはじめて，試験管の中身についての報告者 A の発言が正しいか，間違っているかを判定できる A と B の間主観的な世界が成立する。そして，判定者 B が「たしかに銅が含まれている」と是認したとき，試験管の中身という客観的世界について報告者 A と判定者 B は共通の信念を持つことができる。また，判定者 B が「いや含まれているのは鉄だよ」と否定したとすれば，試験管の同じ変化を見ても違う信念を持っているのだとお互い確認することはできる。いずれにしても，同じ対象をめぐるコミュニケーションによってはじめて真偽のやり取りができるのである。

そして，Davidson は，コミュニケーションによって真理を確定するためには，「善意の原則」principles of charity に基づくことが必要だとする。コミュニケーションによる真理の確定は，話し手と聞き手に以下のことを要求する。

自分の言葉を理解してもらおうと望んでいる話し手が，自分がどんな場合に文に同意するか――つまりその文を真と見なすか――に関して，彼を解釈しようと望む人々を系統的に欺くはずはない。それゆえ，原理的には，意味は，したがってまた意味と結びついた信念は，公共的な形で確定されうる。（Davidson 2001 邦訳書:234-5）

（聞き手は）ある人の行為と発話と世界内での位置を踏まえた上で，その人ができるかぎり理解可能となるような形で解釈を行うことである。われわれは，ある事柄に関しては彼が誤っているのを見いだすだろうが，それは，別の点では彼が正しいことを見いだすための必要経費である。（Davidson 2001 邦訳書:241　カッコ内は筆者が補足）

話し手は，自分で真実と思ってもいないことを発言するかもしれない。しかし，それが常態であれば，コミュニケーションというものは成立しないであろう。試験管を見て「この中には銅が含ま

れている」と言った報告者 A は，本当に銅が含まれているという信念を持って発言している。話し手は自分の信念を理解してもらいたいと思って発言している，と考えたほうがよい。そして，判定者 B は報告者 A が試験管の変化を見て「この中には銅が含まれている」と判断したのだろうと理解するように努めたほうがよい。話し手が誤っている場合もあるかもしれないが，聞き手は話し手が何を根拠にその発言をしたのかを理解するようにしないと，やはりコミュニケーションは成り立たない。

Davidson の「善意の原則」は，２つの原則から構成される。①斉合性の原則は，話し手の思考にある程度の論理的整合性を見いだすように解釈者を促す。②対応の原則は，話し手が応対している世界の特徴が，同じような状況におかれた場合に自分（解釈者）が応対するであろう特徴と同じものだと理解するように解釈者を促す（Davidson 2001 邦訳書：326）。

R. B.Brandom は，われわれは理由をやり取りする「言説的実践 discursive practice」を行なっており，その言説的実践には真偽や適切不適切を判断する規範性 normative を含むとする。

> 言説的実践の中核には，理由を提供したり問うたりするゲームがある。（中略）言説的実践は，暗黙のうちに規範的である。言説的実践には，本質的にやり取りが正しいか正しくないか，適切か適切ではないかという評価が含まれている。（Brandom 1994：159）

Brandom は，言説的実践にはコミットメント commitment と資格 entitlement という二つの規範的要素が含まれるとする。コミットメントは言説的実践において「何をすべき（すべきでない）」，資格は「何をしてよい（よくない）」ということを意味する（Brandom 1994：159-61）。言説的実践ではコミットメントは，発言に対して責任を負うという形で生じる。ここでは，白川晋太郎のまとめを参照する。花子が「金魚係は私がやる」（P）と主張したとする。

> 花子はみずから P に対するコミットメントを引き受けたことになる。それを聞いていた太郎は，P に対するコミットメントを花子に帰属させる。花子のコミットメントは，花子と太郎の二人の視点から捉えられていることに注意しよう。花子が引き受け，太郎が帰属させることによってはじめて花子のコミットメントが成立する（どちらか一方のみの規範的態度ではコミットメントは成立しない）。コミットメントという規範的地位は本質的に社会的なものである（これは規範的地位に「客観性」をもたせるためである）（以下略）。（白川 2021：102-3）

「金魚係は私がやる」と主張した花子は，そう発言したと同時に金魚係を引き受ける責任を負う。だが，それが独り言であれば責任は生じない。責任が生じるのは，聞き手の太郎がたしかに花子はそう発言したと確認した時である。その意味でコミットメントは，「社会的」なのである。

> 意義ある主張的な言語行為を特徴づける権威 authority と責任 responsibility の組み合わせ

は，社会的に socially 接合される。ある人は主張を行うことで，自分自身で責任を引き受ける。（責任によって条件づけられる）行為の権威は，今度は，彼らの主張の責任を聞き手が果たす新しい道を開くことに移る。（Brandom 1994：174）

また，資格について Brandom は，資格の「デフォルトと挑戦の構造 default and challenge structure」という形で言及している。

コミットメントがある発言者に与えられた時にはしばしば，その発言者に資格もデフォルトで与えられる。ある発言者に与えられたコミットメントの初期のとりあえずの地位は，永久でも揺るがないものでもない。主張されたコミットメントへの資格付与には挑戦することができる。（Brandom 1994：177-8）

上記の例で言えば，「金魚係は私がやる」という花子の主張を確認した時に，聞き手の太郎が何も否定や反論をしなければ（黙っていれば），太郎はデフォルトで花子の資格も承認したことになる。だが太郎は，「花子には金魚係は任せられない，なぜなら……」とか，「いや，金魚係は自分がやる（資格があるのは自分だ）」と，花子の主張に挑戦することもできる。

この聞き手によるデフォルトでの資格の承認は，Brandom において「信頼可能性」reliability の議論へと展開していく。Brandom は，「信頼可能性推論」the reliability inference という過程を次のように説明する。

信頼できる報告者 a reliable reporter が推論なしで noninferentially コミットメントを引き受けることは，他の人がその内容へのコミットメントを引き受けることを推論的に権威づける inferentially authorize ことになりうる。ある人を信頼できる報告者と見なしまたは扱うことは（ある状況では），判定者にとっては，推論なしに獲得された正しいコミットメントを報告者に帰属させることから，対応するコミットメントを判定者が引き受けること（そして，他者に同様に資格を与えること）へと移行することの妥当性を保証することになる。（Brandom 1994：216）

再び上記の例で言えば，「金魚係は私がやる」という花子のコミットメントを，花子とやり取りしている聞き手の太郎が受け入れたということは，太郎も「金魚係は花子がやる」ことを是認したことになる。そして，「信頼可能性推論」とは，太郎と花子のやりとりを見ていた人（判定者）が，太郎も同じコミットメントを引き受けたのだと推論し，やり取りの観察を通じて自分もそのコミットメントを信頼することを意味する。

推論主義の枠組みでは，信頼可能性という概念は，まず問題となっている人を信頼可能とみ

なすという他者の態度を通して理解され，さらにそれは，その人の観察報告内容に自分もコミットし，自分の推論の前提として利用しようとする態度として説明される。（白川 2021：234）

なお白川は，この信頼可能性推論では，太郎が花子のコミットメントを引き受けたのだという判定者の推論が正しいかを証明するものは何もないので，今度は判定者の判定が正しいかを判定することが必要になるという「無限後退」が発生するとしている（白川 2021：236-7）。ただ，筆者は判定者がコミットメントした主張に当面不都合がない限り（デフォルトへの有効な調整がなければ），コミットを保持しておくというのが，プラグマティックな態度だと考える。それは，白川も是認するウィトゲンシュタインに由来するとされる「規範に関するプラグマティズム」に基づいている。

私たちは個々の具体的な状況において，ある主張や推論を適切・不適切と判断しているという事実を，それ以上説明を要さない端的な事実として認め，そこからすべての議論をはじめる。何かを正しい／適切とみなすときには，明示的な規則を参照しているわけではないし，そのような判断が傾向性に還元されるわけでもない。他の何ものにも還元されない規範的な判断や評価が，原初的に存在している。（白川 2021:108）

ニュース・フレーム論に示唆するところとして，「規範に関するプラグマティズム」「デフォルトと挑戦の構造」こそ，まさにフレームの性格をよく表現しているのではないだろうか。オーディエンスは，世界認識の手がかりとして，当面不都合がない限りジャーナリストがコミットメントする報告を受け入れている。そのことで，オーディエンスはジャーナリストを信頼できる報告者とみなして，自らもジャーナリストの報告にコミットメントしていると言える。とりあえず，その状態をデフォルトの「オーディエンスの自然的態度」と仮定して，ジャーナリストの報告に対する挑戦がいかにして発生するかを見る必要がある。

4.2　信念と行動

3.1.3 で検討したように，Peirce，James，Dewey ら初期プラグマティストは，これまで行動を支えてきた信念が揺らぎ活動の指針を失うことから新しい探究が始まるとしていた。ここで信念と行動の関係について追加的に考察を行っておきたい。

プラグマティズムにおいて「信念 belief」とは，「彼はこの国の腐敗した政治を変えるために選挙に立候補した」などという，使命感に基づいた堅固な意思のようなものだけを意味しているわけではない。Peirce が提示した事例で言えば，財布に 5 セント銅貨一枚と 1 セント銅貨五枚があって料金をどちらで払おうかという「疑念」に対して，どちらで払うかを決めるのが「信念」である（Peirce 1878 邦訳書:174）。そして信念には，「疑念のもたらす苛立ちを沈静させ」，習慣という「行為規則を確立する」特性がある（Peirce 1878 邦訳書:177）。

Dewey は，「知性は判断と結びつけられる。すなわち，知性は結果をもたらす手段の選択及び配列と結びつけられ，われわれが目的として取りあげるものの選択と結びつけられる。人が知性的であるのは，（中略）状況の可能性を評価でき，この評価にしたがって行動できる人間の能力によるものである」とする（Dewey 1929 邦訳書:223）。ある結果をもたらすために，状況を判断し手段を選択するのが知性の働きだとするのである。

> その事物が「役に立つ（will do)」ということは，一つの判断である。それは予言を含んでいる。それは，その実物が継続して奉仕する未来を予期している。すなわち，それは役にたつだろう（it *will* do）という未来を予期している。それは，その事物が積極的に制定する結果を断言する。すなわちそれは役に立つ（it will *do*）という結果を断言する。（Dewey 1929 邦訳書:273）

Dewey は，「able」「worthy」「full」という語尾を持つ語とそうでない語，例えば noted（注意された）と notable（注意できる）・noteworthy（注意する価値がある）という語を比較しながら，この二つを区別することの意義を次のようにいう。

> すでに存在する事実の単なる報告と，事実を存在させること，または，もし事実がそこに存在するなら，その存在を持続させることの重要性と要求に関する判断との間の差異の意味を伝えるのを助けるのである。後者は純粋に実践的判断であり，行動と指導と関係のある唯一の型を示すものである。（Dewey 1929 邦訳書:274）

信念の確立と実践的行動とを結びつけるこのようなこのようなプラグマティズムの志向は，Wittgenstein の弟子である G.E.M.Anscombs の『インテンション』にも通じる考え方である。Anscombs は，「意図的行為とはそれに対し特定の意味での『なぜ』の問いが適用されるような行為のことだ」とする（Anscombs 1963 邦訳書:274）。

Anscombs によれば，意図的行為には，復讐，感謝，憐憫，呵責など過去の出来事（や現在の状況）が行為の理由となっている「過去志向型動機」と，尊敬，好奇心，憎悪，友情，恐怖，真実への愛，失望などの「未来志向型動機」がある（Anscombs 1957 邦訳書:56-9）。例えば復讐という「過去志向型動機」では，B はある人物 A から過去に害を与えられたので，A に害を与えているのだと説明される。尊敬という「未来志向型動機」では，D はある人物 C を尊敬しているので，C の講演会に参加しようとするなどの行動が考えられる。

Anscombs は，「過去志向型動機」の，復讐，感謝，憐憫，呵責といった行為の動機とそれに基づく行為では，ことの良し悪しの関わり方が決まっているとする。例えば，ある人物 E が私に良いことをしてくれたので，その人を傷つける意図を伴った何かをすることで，感謝を表明することはできない（Anscombs 1957 邦訳書:59）。同じく「未来志向型動機」においても，「ここで問題に

すべき未来の事態は，問われている当の行為によってもたらされるであろう，もしくはもたらされうる，と行為者が考えているとわれわれが理解できるようなものでなければならない」（Anscombs 1957 邦訳書:86）。

さて Anscombs は，意図的行為と状況や手段についての知識との関係を次のように述べている。

> もし，現状に関する知識や見解があり，さらに，たとえば A，B，C と言った特定のことをここで行なったならば Z といった事態が生じるであろうという知識や見解もあるならば，行為者は A，B，C を行うことで Z を行おうという意図を形成しうる。そしてもし，事実そのような知識が行為者にあったり，その見解が正しかったりするなら，Z をすることや Z をひき起こすことは意図的な行為になる。（Anscombs 1957 邦訳書: 112-3）。

Anscombs は，意図的な行為をもたらす状況や手段に関するこのような知識を「実践的知識」と呼び，その知識を支えるのが，アリストテレスに由来する「実践的推論」もしくはそれと同じ意味をもつ「実践的三段論法」だとする（Anscombs 1957 邦訳書: 125）。

アリストテレスは，「(a)乾いた食べ物はすべての人間の身体に適している」，「(b)甘いものはすべて[私が]味見をすべきである」，「(c)すべて甘いものは快い」，「 (d)これこれのような人はこれこれのようなことを行うべきである」といった，「適している」「べき」「快い」という判断を伴った全称的前提を「実践的三段論法」の開始点に据える。Anscombs によれば，ここでの「べき」は，アスリートはトレーニングを続けるべきだ　妊婦は自分の体重に気をつけるべきだなどと同じように，「使用文脈の制限なく非常に気軽に使える言葉であることに気づく」（Anscombs 1957 邦訳書: 136-8）。

Anscombs は，意図的な行為をもたらす動機について以下のよう言う。

> われわれにとって興味のある欲求とは，空虚な願望のことでも希望のことでも欲望の感覚そのもののことでもない。欲するものを手に入れるために何もしない人間の中には存在しないと言うべき何かのことである。
>
> 欲求の原初的な徴候は何かを得ようとしているということである。それはもちろん，感覚を備えた生物にのみ帰することのできる特徴である。したがってそれは，単に何かに向かって動きが生じたり身体部位が伸びたりすることではなく，対象について知っていると言える生物の内側から生じる行動なのである。（中略）したがって欲求には二つの特徴的要素があることになる。すなわちそれは，対象に向かう運動と，その対象がそこにあるという知識（すくなくともそうした見解）である。（Anscombs 1957 邦訳書: 144-55）

意図的行為と実践的知識に関するこのような Anscombs の見解は，信念とは行動に指針を与えるものだとするプラグマティズムの主張と共通の志向を持っていることがわかる。Davidson も，

意図的行為に関する Anscombs の見解とプラグマティズムの信念概念を接合するように，次のように述べている。

> ある人がある理由で何かをなす場合，つねに，その人は，(a)ある種の行為に対し何らかの賛成的態度（pro attitude）を取っており，(b)自分の行為がその種のものであることを信じている（あるいは，知っている，分かっている，認めている，思い出している），と考えることができる。（中略）行為者が何かをなした際の理由を述べることは，しばしば，賛成的態度(a)，あるいは行為の関連した信念（b），あるいは両者を名指すことにほかならない。（Davidson 1980 邦訳書: 3）

> 行為の主たる理由を構成する信念と態度に対応させて，われわれは，その行為が（アンスコムの言う）何らかの「望ましさという特徴」をもつと結論づけるための三段論法の前提を，（少し工夫を加えて）構成することがつねに可能である。（Davidson 1980 邦訳書: 10）

5. ニュース・フレーム論への示唆

これまでの検討を踏まえ，プラグマティズムがニュース・フレーム論に与える理論的示唆をまとめてみたい。藤田（2021）で言及したように，ニュース・フレーム論のプロセス・モデルは，⑴フレーム構築：ジャーナリストが適用するフレームの作成や変更に影響を与えるプロセス，⑵フレーム設定：メディアの作成したフレームがオーディエンスに伝えられ，オーディエンスがフレームを獲得するプロセス，⑶個人レベルのフレーミング効果：オーディエンスが獲得したフレームがオーディエンスの行動・態度・認知変数に与える個人レベルの影響を，フレームという概念で総合的に把握するものであった。この分類に即して知見を整理したい。

⑴フレーム構築

フレーム構築に関しては，①初期プラグマティストによる「研究者コミュニティにおける真実性の確定」の主張，②実験的介入による漸進的な真理の確定，③ネオプラグマティストによる観察の限界，④社会的実践への移行，私－他者－対象の三角関係などが示唆的である。

①Peirce，James，Dewey ら初期プラグマティストは，真理の確定は研究者個人ではなく，研究者のコミュニティまたは社会において達成されるとする。ニュース・フレーム論に敷衍するならば，「どのような出来事をニュース（ニュース価値がある）と見なすか」「この出来事はどのような意味があるか」などの点についての認識の確定がジャーナリズム組織の内部で発生していると見ることができる。あるいは，情報源とジャーナリストによってコミュニティが形成されているとみなし同様な考察ができる。

②実験的介入による漸進的な真理の確定は，プラグマティズムの中心的な主張である。実験的介入による仮説の検証は，科学的探究という意味で，ジャーナリズムにおける「客観報道」パラダイ

ムと価値を共有するものなのか，介入（例えば調査報道）という行為が加わる点で相反するものなのか検討する必要がある。

③ネオプラグマティストの Quine や Rorty は，観察だけで確定できる真理には限界があり，真理の確定には言語，言語によって形成される概念・命題が必ず介在しているとした。この知見はジャーナリズムにおける「客観報道」パラダイムの限界を指摘する際にも援用できるであろう。

④社会的実践への移行，および私－他者－対象の三角関係というネオプラグマティストの知見をたよりに，フレーム構築を情報源とジャーナリストが同じ対象（出来事）の意味をめぐってやり取りをする相互作用の過程とみなすことができる。

⑵フレーム設定

フレーム設定については，①Lippman『世論』における「像」概念，②初期プラグマティストによる「研究者コミュニティにおける真実性の確定」の主張，③ネオプラグマティストによる社会的実践への移行，および私－他者－対象の三角関係などが関わってこよう。

①Lippman『世論』は，人々の活動領域が広がった「大社会（グレート・ソサエティ）」では，新聞記事が「現実」を写しとる「模型」＝実像となっており，メディアが伝える「模型」を通して「真の」環境について知るべきだとする。

②上記フレーム構築で言及した，初期プラグマティストによる「研究者コミュニティにおける真実性の確定」の主張については，ジャーナリスト組織とオーディエンスによって形成されるコミュニティを考えることもできる。

③ネオプラグマティストの社会的実践への移行，および私－他者－対象の三角関係という知見から，フレーム設定をジャーナリストとオーディエンスが同じ対象（出来事）の意味をめぐってやり取りをする相互作用の過程とみなすことができる。

⑶個人レベルのフレーミング効果

個人レベルのフレーミング効果については，①Lippman『世論』における「像」概念，②Peirce の信念と疑念，James の観念と新しい事態への対応，Dewey の不確実性からの脱出，③初期プラグマティストによる「研究者コミュニティにおける真実性の確定」の主張，④実験的介入による漸進的な真理の確定，⑤ネオプラグマティストによる観察の限界，⑥プラグマティズムにおける信念と行動の検討が関係するだろう。

①Lippman『世論』における「像」概念は，「行為の現場について人間が思い描くイメージ」が，人々の行動を規定しているとする。

②Peirceの信念と疑念，James の観念と新しい事態への対応，Dewey の不確実性からの脱出は，いずれも人間は自分の周辺の状況についての安定した認識（信念，習慣）を持っていることが望ましい。だが，新しい事態が出現して安定した認識が揺らいだ時（疑念，不確実性）には，新たな事態に対応した行動指針を得るために探究が行われるとする。James は，目前の課題への適用ではな

くとも，新しい事態に備えて真理を蓄えることの効用も視野に入れている。

③初期プラグマティストによる「研究者コミュニティにおける真実性の確定」の主張については，相互のやり取りによってニュースの真実性を確定するオーディエンスのコミュニティを考えることもできよう。

④実験的介入による漸進的な真理の確定については，オーディエンスが自分の周辺の状況について信念を確定する過程において作用している可能性がある。

⑤ネオプラグマティストによる観察の限界の主張は，オーディエンスの状況認識にも同様の知見をもたらす。オーディエンスの情報認識には，他者の言説によって形成されたフレームが必然的に介在していると考えることができよう。

⑥初期プラグマティストや Anscombs が主張するように，オーディエンスの実践的知識はオーディエンスが意図的行為を行う基盤となる。

なおニュース・フレーム論のプロセス・モデルでは，ジャーナリズム組織が媒介となって，情報源からオーディエンスに情報が移転する「伝達モデル」が「像」として想定されているよう見える。だが，本稿で参照してきた知見からは，オーディエンスの関与なしには成立しない言説的実践の空間としてフレーム形成のプロセスを構想することもできるように思われる。

【参考・引用文献】

Anscombs,G.E.M.,1957, *Intention*, Basil Blackwell.（柏端達也訳, 2022,『インテンション』, 岩波書店）

Brandom, R. B.,1994, *Making it Explicit : Resoning, Representing,and Discursive Commitment*, Massachusetts: Harvard University Press.

Davidson,D., 1980, *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press.（服部裕幸・柴田正良訳, 1990,『行為と出来事』, 勁草書房）

Davidson,D., 2001, *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford University Press.（清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳, 2007,『主観的，間主観的，客観的』, 春秋社）

Dewey,J., 1920, *Reconstruction in Philosophy*, New York:Henry Holt.（清水幾太郎・清水禮子訳, 1968,『哲学の改造』, 岩波文庫）

Dewey,J., 1927, *The Public and its Problems: An Essay in Political Inquiry*, Henry Holt & Company.（阿部齋訳, 2014,『公衆とその諸問題　現代政治の基礎』, ちくま学芸文庫）

Dewey,J., 1929, *Quest for Certainty*, George Allen and Unwin.（河村望訳, 1996,『確実性の探究』, 人間の科学社）

藤田真文, 2021,「ニュース・フレーム論の理論的射程と空間定位（前編）」,『社会志林』68(3), 13-29.

Gamson,W. A.,1985,“Goffman’s Legacy to Political Sociology,”*Theory and Society* 14: 605-622.

Goffman,E.,1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.

James ,W.,1907, *Pragmatism*.（舛田啓三郎訳, 1957,『プラグマティズム』, 岩波文庫）

Johnson-Cartee,K.S.,2005, *News Narratives and News Framing: Constructing Political Reality*, Rowman&Littlefield Publishers,Inc.

Kuhn,T.S.,1962,1970, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: The University of Chicago Press.（中山茂訳, 1971,『科学革命の構造』みすず書房）

Lippman, W.,1922, *Public Opinion*, The Macmillan Company.（掛川トミ子訳, 1987,『世論（上・下）』岩波文庫）

中河伸俊, 2015,「フレーム分析はどこまで実用的か」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン　やりとりの秩序の社会学』新曜社, 130-47.

Peirce,C. S.,1868, *Some Consequence of Four Incapacities*.（「四つの能力の否定から導かれる諸々の帰結」植木豊編訳, 2014,『プラグマティズム古典集成　パース，ジェイムズ，デューイ』作品社, 93-143.）

Peirce,C. S.,1877, The *Fixation of Belief*.（「信念の確定の仕方」植木豊編訳, 2014, 前掲書, 144-67.）

Peirce,C. S.,1878, *How to Make Our Ideas Clear*.（「我々の観念を明晰にする方法」植木豊編訳, 2014, 前掲書, 168-97.）

Peirce,C. S.,1905, *What Pragmatism Is*.（「プラグマティズムとは何か」植木豊編訳, 2014, 前掲書, 198-228.）

Quine,W. V. O.,1960, *Word and Object*, Massachusetts: M.I.T. Press.（大出晁・宮館恵訳, 1984,『ことばと対象』, 勁草書房）

Rorty.R.,1979, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press.（野家啓一監訳, 1993,『哲学と自然の鏡』産業図書）

白川晋太郎, 2021,『ブランダム　推論主義の哲学：プラグマティズムの新展開』青土社

Tuchman,G.,1978, *Making News: A Study in the Construction of Reality*, New York: Free Press. Press.（鶴木眞，櫻内篤子訳，1991,『ニュース社会学』三嶺書房）

Wei,X.,2020, *Epistemology of News Frame(China Perspectives)*, New York , NY:Routledge.

Wittgenstein, L.,2003, *Logisch-philosophische Abhandlung*,Bibliothek Suhrkamp.（丘沢静也訳, 2014,『論理哲学論考』光文社古典新訳文庫）

Wittgenstein, L.,2009, *Philosophische Untersuchungen,Revised 4th ed*.,Wiley-Blackwell.（鬼界彰夫訳,2020,『哲学探究』講談社）